ラックを運転して来ていたが，何が観測主題かわからない．ローマ天文台の M. シミノは結局来なかったらしい．

10. アレキパ県ではないが，東北大の加藤愛雄教授は助手2名を伴ない，ワンカベリカ県サンタ・イネスにあってIGPの所員と共同で地磁気の微小脈動を測り，生駒山太陽観測所の堀井政三氏は同じく IGP の石塚睦氏と協力して同地で閃光スペクトル撮影をおこないともに成功した模様である．先年クック諸島での日食でお目にかかったクック諸島天文協会のキンガム氏もペルーにあって電離層の観測をしている．帰途 IGP で偶然かれと再会して，まことに地球は狭くなったと思った次第である．その他新聞報道によれば150人の内外科学者がペルー日食の観測をおっこなったという．リマでは日食中に27人の出産があったとか．

11. こんどの日食で東京天文台の観測団としては，はじめてスペイン語国へ入国するわけであった．過去の記録を調べて見ると，古くは大先輩が出かけたインド(1898)・スマトラ(1901)・マレー(1929)・アメリカ・メイン州(1932)の日食から，近くはセイロン(1955)・スワロフ島(1958)・ニューギニア(1962)・アラスカ(1963)・マヌエ島(1965)の日食に到るまで不思議に出張先はみな英語国であった．

今回の日食観測地がペルーと決まり，同国の関係方面に問合わせると必らずスペイン語で返事がくるのには困った．準備に忙しいわれわれの内では比較的時間の余裕のある小生が意を決して東京のスペイン語の学校に通学することにした．3個月通学をした甲斐あってペルーから来る回報や通信文は辞書を片手に一応解読できるまでになった．われわれが一個月止泊したアレキパのペンションには年頃の3人ムスメがいて食卓をともにして親しくなったが，英語とスペイン語とをまぜてやっと意味が通じたり通じなかったりした．中でも平山君は目は口よりも物をいいたちまち会話が上達したのは恐れ入った．ところでアレキパでは前記森崎氏がいて，官庁関係への挨拶連絡など一切を率先してやってくれたので事は誠に円滑に運んだが，同時に小生のスペイン語は，さっぱり上達しなかった．

12. 明治時代に南米への日本人の集団渡航はペルーが最初である由にて，リマ市には現在，日本人が約5万居住していて日本人会を組織している．一世は明治生まれで大日本帝国に郷愁をもっていて，日本から訪れる知名人に対して古きよき愛国心をもって歓待してくれる．最近はアンデス登山や南米無銭旅行で若い人々がたくさん押しかけてご迷惑をかけていそうであるが，あたたかくもてなしている．

日本の工業製品の進出は，ソニーラジオ・味の素・ナショナル電化製品・ミキモト真珠・トヨタ自動車などが町に見かけられた．殊にソニーはアメリカの同業者を圧して進出している様である．日食で関係したペルーの学者や一般人の間には，工業力の皆無なペルーは工業力で成功した日本を手本にこれから努力しようとの気慨が見え，たぶんその意味でわれわれは歓待された．すなわちアレキパ市文化人協会・同大学・同高校などでの講演会や地学教員連盟のパーティへの招待など，日食準備に忙しいわれわれは，有難めいわくなくらいの関心を示してくれた．

13. ペルーは日本とおなじく南北に細長い国なので，皆既食にしばしば横断される．中でも1937年の日食には当時京大の山本清一博士が柴田淑次・堀井敬三の二氏を伴なってペルーに渡航し，トルヒヨ市郊外のワンチャコ浜に観測機械を据え，終始苦心のすえ日食当日は快晴に恵まれてコロナの観測に成功したという話は「天界」第17巻(1937)に詳しい．つまり，今回は日本の観測隊がペルーでおこなった日食観測としては第2回目である．リマの日本人会の元老級の人は当時の山本博士らをよく記憶されていて29年前をなつかしむのであった．

現在ワンカイヨの IGP には京大出身の石塚・野村の二氏が太陽観測部門を司っている．リマからアンデス越えの鉄道で9時間かかってそこを訪ねたときもご家族ともどもお元気であった．異郷の地にあってますますご健闘を祈りながら，11月下旬帰国した．(1966. 12. 16)

ペルー日食雑記

平山　淳*

「マリーヤ！　テルモス！」と宿の女中さんに，べんとうのときに使うお湯を急いで入れさせ，老朽車タウナスを駆って観測地チウアタ村へ向かう．宿のあるアレキパ市より約50分，日江井さんと途中で運転手交替をする．斎藤さんは後の座席で悠然と構えて乗っている．アレキパを出るとたちまち砂漠の真ただ中，埃がものすごい．まるきり木がない景色というものは，「殺伐としている」というような生易しいものではない．ギラギラ真上から照っている陽ざしも相まって，壮絶というか，インディオしかそれを形容する言葉を知らないとでもいう他な

* 東京天文台

いだろう．観測地に近づくとようやく北海道でみかけるような背の高い木がちらほらと立っているのが見え始める．観測地は小学校の校庭，そこでテント生活を楽しんでいる秦さんが「ブエノス・ディアス（おはよう）」と迎えてくれる．これが朝の8時半．これから夕方6時まで観測準備の仕事に没頭するわけだが，この生活が約一ケ月続いたというわけである．

さて，この国には泥棒が多いというので，警官に昼夜張り番をしてもらったわけだが，寒い夜など秦さんは彼等にペルーの焼酎ピスコを飲ましてやる．もちろん自分でも飲んで，スペイン語とも英語とも日本語ともつかぬ言葉で彼等と語るらしいのだが，それが非常に良く通じるらしいのである．失礼な話だが，秦さんは我々同様スペイン語をあまり良く知らない．警官はむろんのこと村人達は英語も日本語も丸きり知らない．しかるに，村人が我々に，この地方にしか住んでないというリャマなる動物を今日の午後みせてくれると云っているから行こうだとか，その他もろもろのことによって言葉がよく通じているということは疑うべくもないのである．ついでながら，我々が無事日食観測を終わって村を引き揚げる段になって，一人の警官が秦さんと別れるのはつらいといって男泣きに泣き出した．これをみて，みんなで，警官に泣かされたとか，女を泣かしたということは聞くけれど，警官を泣かしたという人は初めてだろうといって感心したしだいである．

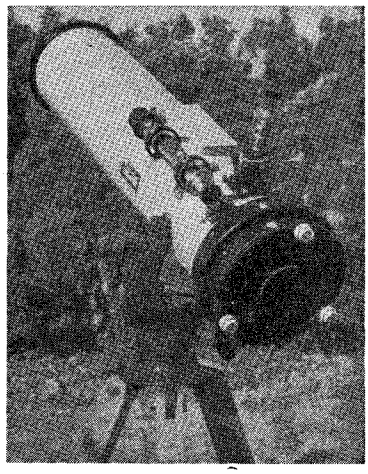
我々一行4人のうち斉藤（国治）さんだけは3ケ月の速成スペイン語を習っていたので，どうやら読み書きができるのだが，それでも肝心の労働者に払う賃金のことだとか，トラックの手配のことに到ると手に負えなくてアレキパ市に 40 年も住んでいる森崎さんという老人の手を貸りることになる．まして，私などは，「今日は，お嬢さん」とはいえても，それをどう綴って書くのか皆目分らないのだから情けない．ともかくスペイン語には全く閉口したのが今回の日食観測の一つの特徴だった．

日食の起る 2～3 日前になって，ハーバード大学のメンツェル教授等の一行が同じ村で観測すべく我々を訪ねて来た．さっそく私共の器械を見せて，彼が 30 年以上も前にやっていたフラッシュ・スペクトルといかに違うかしかもプロミネンスを副産物としてではなく，主目的の一つとしてねがっているのは今回が切めてだというようなことを説明しようと思ったのであるが，彼は自分の最近の仕事のことを喋り出して，こちらに話す機会を与えてくれない．黒点の磁気流体的モデルを作って，それからフレヤーの理論を作ろうとしているだとか，なぜ黒点は黒いかという問に対するビヤマンの一つの解答に疑いを持っているだとかを，私が何に興味をもっているかということにおかまいなく，熱っぽく話し続けるのである．しかし，私には話の内容よりも，この老大家が見ず知らずの馳け出しをつかまえて，仕事のことを話しているということが，実に気持が良かった．

ペルーの帰りにアメリカのサクラメント・ピーク天文台にも寄ったのだが，ここでもエバンス台長が，ちょっと部屋へ来いといって，これまた最近彼がやっている太陽光球の運動をしらべるために撮ったスペクトルを見せてくれて，その結果や，解決できないでいる問題などを話してくれたのだが，これも好印象の一つだった．

メンツェル教授と相前後してスイスのワルドマイヤー教授が単身でやって来て，我々と同じ場所に陣どり，時間のうちに望遠鏡を組立て，「全ての準備は完了した」といってうまそうに煙草を喫いはじめたのには，一度ニューギニヤで見てはいるものの，またまたびっくりさせられた．我々は日江井・平山のスペクトル組は，欲張って大型カメラ2台の他に，ニコンモータードライブ2台を持って来て，やれフォーカス・テストだ，やれ自動露出加減装置の整備だ，とやっているので，一ケ月のべつまくなしに働いていて，しかも日食前夜の夜遅くまで各種の点検をやったので，ワルドマイヤー先生との労働時間の差たるや，大したものになっているはずである．我々も老大家（？）になったら，メンツェルやワルドマイヤーのように楽な観測を一度はしてみたいと，日江井さんと二人で話し合った．

カンコー天体反射望遠鏡



二十糎CG式焦点距離二段切換
天体反射望遠鏡

★ 天体望遠鏡完成品各種
★ 高級自作用部品
★ 抛物面鏡，平面鏡，軸外し抛物面鏡
★ アルミニューム鍍金
★ 電源不要観光望遠鏡（カタログ要 30 円切手）

関西光学研究所
京都市東山区山科竹鼻　TEL 京都㊽ 0057

1966 年 11 月 12 日，日食当日は朝４時半に起床，８時の日食までに全ての器械を再点検し，フィルムを装てんして来るべき瞬間に備えた．斎藤・秦のコロナ組は，ベテランらしい余裕をもって臨んでいるようであった．私共２人は，1962 年のニューギニア日食の際に，大事な瞬間になって器械（カメラ）が故障してしまったという実に苦しい経験をもっている．そのため，今回はあらゆるところに事故防止を考え，例えばクロノメーターとクロノグラフを２台ずつ用意するなどして，万全を期した．

空は幸いに晴れ，第一接触をかなりすぎて，第二接触の３分前から撮影を開始し出した．あたりが暗くなって２二つの大型カメラが規則的に連続回転して，本番のスペクトルが撮れ始めたということを感じたとき，いいようのない感動に襲われた．

全部が撮り終わっても二人共口を開かなかった．斎藤さんがうまく撮れたかどうかを聞きに来た後初めて二人で握手した．「足掛け５年目でやっとうまく行なたね．」と喜び合った．

この稿を書いている現在，現像は殆んど終わり，事実成功したことが分っている．コロナ組の方がうまく撮れたことはいうまでもない．結果は追い追い学会や論文で発表する予定であるが，この紙上を貸りて，今回の観測にあたり色々とお世話下さった方々に厚くお礼を申し上げるしだいである．

さて，話は前に戻るが，日食の前後を通じて，宿のあるアレキパへ向かって帰るのは，いつも日が暮れようとする頃であった．チウアタ村は３千米の高所にあるので日中な陽ざしは強くて快適な温度なのだが，夕方になると急に冷えはじめる．セーターなどを着こんで，なかなか掛からない車のエンジンに一苦労させられる．砂漠の夕焼けというのもまた美しく，６千米級の山々が紫色に染まったかと思うと，みるまにまっくろになる．一つの峠へ我々の車がさしかかると，急にアレキパの町の灯が一面に目の前に拡がる．ここで「車よ，あれがアレキパの燈だ」と呪文を唱えて，また運転の交替をするのである．ここから一気に駈け下りて，三人の美しいお嬢さんが待っている我等の下宿へと急ぐ．と書きたいところだが，主語と述語がここでは入れかえられなければならない．我々が，彼女等が居るのを期待して家路を急ぐのである．しかし，帰っても大抵居ない．お母さんと３人娘は年中映画を見に行くからである．残っているのは親父さんと，傭人２人，それに可愛いいが６ツの末っ子の男の子，リッキーだけである．

私共の泊っていた下宿は，アレキパの大学の地球物理の先生が世話してくれたのが，親父さんは養鶏と下宿の本立てで生活をしている．そのため，一ケ月間というもの昼と夜は必ず鶏の料理がでてくる．たまに食べるのならいいが，こう毎日ではやり切れない，しかも味附けが下手で，殆ど同じ味ときているから，これには参ってしまった．しまいにはトサカが生えてくるのではないかと思う程だった．

下宿の３人娘は殆んど英語がしゃべれないので，いきおい斎藤さんに通訳をしてもらうことになる．どうしてスペイン語を勉強して来なかったのかしらんと思ったって追付かない．各種事務折衝のためにと勉強して来られた斎藤さんに一本も二本もやられた感じで，食事時たまたまに一緒になる彼女等に向かって何事かニコニコと話しかけている横顔をただ眺めているという情けない状態であった．

一度我々３人が彼女等の行くダンスパーティに誘われたことがあった．旅の恥はかき捨てとばかり出掛けていったのだ，がお世辞にも３人共うまいとはいえない．事務折衝にも，器械の据え付けにも細心の注意を払って見事にやりこなす日江井さんだけが，ダンスにも才能をみせ，どうにか踊れるといったところである．そのため，最初は女性の方から坐ってばかり居ないで踊りましょうと礼儀上引っぱり出してくれたのだが，会全体が興にのってくると，もう一人も声をかけてくれないし，こちらから頼んでもことわられるという風で，幸いあすは仕事があるからといって，ほうほうのていで逃げ出したようなしまつであった．

アレキパの町はとりたてて大きな産業というものもなく，遊ぶ施設も殆んどないので，ダンス・パーティーなどを夜半すぎまでやって騒ぐのであろうが，ふだんは静かなカトリックの町である．建物はスペイン風に中庭をこしらえ，欄干を二階にとりつけて，落ち付いた雰囲気をかもし出している．町の中央には噴水のある広場があり，真白な石で作ったカテドラルがどっしりとかまえ，その背後に富士山そっくりなミスティ山という火山がそびえてみえる．広場や市場には色どりに織った布で子供を背負ったインディオ達が，物を売ったり買ったり，忙しそうに往来している．乞食もいるし，貧しい家の子供達はハダシだ．石畳のせまい路地にたむろして，何やら遊んだり，タバコを売ったりしている．しかし，これら全ては美しい一つの統一体をなしている．

観測地チウアタ村でもそうである，古ぼけた教会の前には広場があり，そこで時折教会の鐘突き堂に牧師さんが登って鐘を鳴らすのをみることができる．墓地も何のかざり気もない，石や木ぎその十字架の集りだが，いかにも砂漠の真っただ中の村の墓地に相応しい．

そういえば，時々我々の準備作業を見に来ていた 12～３歳の女の子が，別れ際に我々のために歌を歌ってくれた．お礼に彼女にとってはめずらしい水性ペンをあげたら，隣りで見ていた彼女の姉さんが，泣き出しそうな顔をして駆け出して行った．すると，我々を手伝いに来ていたアレキパの学生さんが，ちょっと前にあげたばかりの水性ペンを，これは彼が一週間も前から別れるときに下さいといっていたものだけれど，とっさに追っかけて行って姉さんに渡してやるのがみえた．